

3月4日 四旬節第2主日

創 22:1～18 ロマ 8:31～34 マコ 9:2～10

1. マコ

v.7-8 「すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。“これはわたしの愛する子。これに聞け。” 弟子たちは急いで辺りを見回したが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが彼らと一緒におられた。」

ペトロ、ヤコブ、ヨハネの三人は、人の子の終末における栄光に満ちた来臨の場面を、このとき一瞬目撃したのでした(IIペト 1:16)。イエスは旧約の出エジプトよりもさらに偉大な贖いを実現する(エフェ 1:3-14、Iペト 1:18-21) “モーセのような預言者” である、という天からの声を聞いたのです。ですから、主の洗礼の日聞こえた天からの声に、ここでは“これに聞け” という申 18:15 の言葉が追加されました。神は“新しいモーセ” であるイエスに、「六日後」「雲の中から」呼びかけられ(出 24:16)、そしてその後、モーセと、モーセの再来とそれまで考えられて来たエリヤの二人が姿を消して、「もはやだれも見えず、ただイエスだけが彼らと一緒におられた」と書かれています。

ペトロが「仮小屋を三つ建てましょう」(v.5)と言った言葉も、神が人と共に住む(黙 21:3-4)終末の象徴として、ここに存在しているのです。しかし、キリストの業はこのときにはまだ完成していませんでした。「人の子が死者の中から復活するまでは」(v.9)、まだ福音は未完成であり、復活の勝利を経て初めて“十字架の言葉”(Iコリ 1:18)である福音が“信じる者すべてに救いをもたらす神の力”(ロマ 1:16)となったのです。

今年も私たち教会は、この十字架の福音を“悔い改めて信じる”(マコ 1:15)のために、四旬節の歩みを共にたどって行きます。

2. 創

v.8 「わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の小羊はきっと神が備えてくださる。」

私たちが旧約聖書の中でこの物語を読むとき、今語っているのはアブラハムという伝説の族長ではなくて神の民イスラエルであり、その神は伝説の中の族長の神ではなくて神の民イスラエルの“主なるヤーウエ” であり、そしてさらにそれは、私たちの主イエス・キリストの父なる神であるという厳粛な事実、目を開かねばなりません。

神が最も耐え難く矛盾しているように見える体験を、イスラエルはその歴史の中で繰り返し味わって来ました。そこで“神はイスラエルの信仰を試しておられるのだ” と、この物語りは言うように読めるのです。神御自身が、「イサクから生まれる者が、あなたの子孫と呼ばれる」(ヘブ 11:18)と言われた約束を否定しているように見える状況の中で、この v.8 の言葉は発せられているのです。

この神の隠れた救済意志が、後になって明らかになるという創世記の神学を、私たちはヨセフ物語りの

結末の部分で聞かされます。「…… 神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです。」(50:20)

近代人の、“神は結局は何事でも我々の都合の良いようにしてくれる筈だ”という、ご都合主義的宗教理解が、聖書の浅薄な読み方から生じたことに気づくことは、私たちにとって非常に大切なことです。v.8は、“待てば海路の日和あり”という楽天主義の言葉でもないし、「万事が益となるように」というロマ8:28の言葉もそのようなご都合主義とは全く無関係なのです。

3. ロマ

v.34 「死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成して下さるのです。」

私たちが聖書を学び、福音を正しく聞いて信じるのに必要なものは、救済史の神、秘められた計画を實現される神へのひたすらな信頼と信仰、そして愛です。「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は御自分を愛する者たちに準備された。」(Iコリ2:9) 「神の約束は、ことごとくこの方(イエス・キリスト)において“然り”となったのです。」(IIコリ1:20)

私たちは今日の主日のミサの朗読配分を通して、この神の御業の証言を確かに聞いているのです。どうか洗礼の秘跡によって救いに入れられた人々が、「目に見えるものによらず、信仰によって歩む」(IIコリ5:7)ことを学んで、神からいただいた救いの恵みと御国の希望を感謝する四旬節となりますように。

アーメン。

3月11日 四旬節第3主日

出 20:1~17 Iコリ 1:22~25 ヨハ 2:13~25

1. ヨハ

v.21 「イエスの言われる神殿とは、御自分の体のことだったのである。」

教会はキリストの体であって、聖霊が宿ってくださる神殿であること、そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、そして信者一人一人もこの神殿の生きた石として用いられて、「キリストの体を造り上げていく」(エフェ 4:12)という話を、現代のカトリックの子らはどの程度実感をもって理解しているでしょうか。カトリック教会における秘跡の実効性は、この教会に基礎をおいているのです。典礼憲章は“キリストの神秘体である教会”という表題の下で、「神の子は、…… 御自分の死と復活によって死を克服し、それによって人間を贖い、…… 自分の霊を与えることによって、諸国民から呼び集めた自分の兄弟たちを、自分の体として神秘的に構成したのである」(7)と説明しています。

共観福音書では受難物語りの中に置かれている“神殿から商人を追い出す”話が、ヨハネ福音書ではイエスの宣教の冒頭部分に移されたのは、今や教会を通して「まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時」(4:23-24)が始まったことを、明言するためでありました。そして同時に、その時代の教会の実態がすでに、ともすると「商売の家」(v.16)、つまり個人的で主観的な満足を第一に考える私的結社になる危険性を持っていたことに、警告を発しているようにも読めるのです。vv.23-25はもしかすると、“あなたの信仰は本物ですか？”という当時の信者一人一人への鋭い問いかけを暗示している可能性があります。

いずれにしてもヨハネ福音書は vv.18-22 で、イエス御自身の復活と、その結果としてのキリストの体である教会の誕生という二つの事柄を、福音宣教の基本的前提として再確認しているのです。

2. Iコリ

v.23 「わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。」

カトリック教会の信者にとっては、ロザリオの祈りはたいへん身近なものですが、各一環の祈りのはじめに黙想することになっている三~四種類の神秘(玄義)については、その存在を知ってはいいても、実際に使ったり、まして真剣に理解することが稀であるように見受けられます。

同様にプロテスタントの諸教会では、みんなが聖書を大切にしているにもかかわらず、やはり実際には“十字架につけられたキリストを宣べ伝えている”というようなことは非常に稀なのです。

どうか一人一人の信者に考えていただきたい。あなたが理解している信仰や救いにとって、“神の子イエス・キリストの死と復活”という福音伝承は、必須の要件ですか？ “どうしても、無くてはならない”ほど、重要でしょうか？ もしかすると“御子の十字架の死と復活はなるほど大いに重大だが、絶対的に重大で

はない。究極的には自分には不必要な話である”というのが実感ではありませんか？

事実上の教会の実態が、単に私的な“心の慰め”や“癒やし”を目的に集まるバラバラな個人の集まりになってしまって、福音のキリストが会衆に対して覆われているということが、何を意味するかを私たちは知っています。教会が十字架と復活のキリストを事実上無視するとき、その教会は神から切り離されて“ひとりぼっち”になってしまうのです。

しかし、教会はキリストの体であって、私たち信者は御子の血によって買い取られたのです。生まれながら神の怒りを受けるべき者であった私たちが、今はその血によって贖われ、神の国を受け継ぐ聖なる民の中に加え入れられて、キリストの体を造り上げているのです。使徒や預言者という土台の上に建てられて、そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり(エフェ 2:20)、神の栄光にあずかる希望を誇りにすることを許されているのです(ロマ 5:2)。

十字架の福音の宣教を通して私たちが信じるなどということは、現代人には実に愚かな手段のように見えるに違いありません。しかし、「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強い」(v.25)のです。

3. 出

vv.2-3 「わたしは主、あなたの神、…… あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。」

私たちは、“聖なる、普通の、使徒的、唯一の教会” がどこから産み出され(申 32:18)、どこから掘り出されたか(イザ 51:1)に目を注がなければなりません。教会は“キリストの死と復活”という起源に、そして“キリストの再臨と神の国”という目標によって基礎づけられているということを、私たちは明確に思い起こさなければならないのです。

十戒をただの誡めの羅列と理解するなら、それは律法主義でしかありません。カトリック教会の教えも、そして聖伝も聖書もみな同じことです。しかし、それらを通して教会の起源と目標に目を注ぐことは、私たちにとって、四旬節の課題であり恵みであると知しましょう。「わたしたちは信仰によって義とされたのだから、…… 神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。」(ロマ 5:1-2)

アーメン。

3月18日 四旬節第4主日

歴 36:14～23 エフェ 2:4～10 ヨハ 3:14～21

1. ヨハ

v.14-15 「そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。」

私たちキリスト者の救いは、「ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して」(ロマ 3:24)「その血によって贖われ、罪を赦された」(エフェ 1:7)という「神の賜物」(エフェ 2:8)に全く依存しています。キリストの贖いの死と、罪と死と悪魔に勝利しての復活は、“昔々あるところで……”という、単なる歴史の中の一つのエピソードではないのです。そのことから切り離しては決して、「神は……世を愛された」(v.16)という福音のメッセージを正しく理解することが出来ません。

このキリストによる贖いと罪の赦しの御業は、教会にとっては常に現在の事実であり出来事であるということ、強調したいと思います。カトリック教会の“ミサ典礼書の総則”は、その第一章の冒頭で次のように述べています。「ミサの祭儀は、キリストの行為であり、(救いを受け、感謝し賛美する)神の民の行為であって、……キリスト者の生活全体の中心である。実に、ミサの中にキリストにおいて世を聖とされる神の働きの頂点があり、また人々が、神の子キリストによって父にささげる礼拝の頂点がある。」(1)

カトリック教会の伝承における特に重大な教えが、“秘跡的再現”という用語で説明されています。「すなわち、十字架上のいけにえと、ミサにおけるその秘跡的再現は、奉獻のしかたを除けば同一のものである」(2)と、教えられているのです。

私たちがいろいろな機会に、特に主日に“ともにささげるミサ”の中に、「御子によって世が救われる」(v.17)神の働きの頂点があり、同時に「信じない者は既に裁かれている」(v.18)という神の判決があるのです。「わたしたちには神の家を支配する偉大な祭司がおられるのですから」(ヘブ 10:21)、洗礼の秘跡によって救いに入れられた私たちは、教会が「公に言い表している信仰」(ヘブ 4:14/教会に平和を願う祈り)を揺るがぬようしっかり保って、ともにミサをささげることを、今年も四旬節に学んで行きましょう。

2. エフェ

v.5 「罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、——あなたがたの救われたのは恵みによるのです。」

キリスト教関係の雑誌や新聞の数々の記事を読んでいて、私がいつも不満に思うのは、このキリストの贖いと罪の赦しという福音の核心が語られることが非常に稀だということです。その昔西行法師が伊勢神宮に参ったときの有名な歌に、“なにごとの おはしますかは 知らねども かたじけなさに 涙こぼるる”というのがあります。そのように現代の教会は、“神様が”いつもニコニコしているキリスト教 なにごとの

おはしますかは 知る人ぞなし”という状態なのです。

しかしカトリック教会は、世を聖とされる神の働きにすべての信者が豊かにあずかれるように、第二バチカン公会議を経て典礼の刷新を進めて来ました。ですから私たちが現在のミサ典礼書について学ぶとき、「この刷新によって、典礼文と儀式が示す聖なることがらが、明白に表現された」ことと、「キリストを信じる民が、聖なることがらを……理解し、……意識的、行動的にこれに参加」するよう求められていることを、尊重しなければなりません(典礼憲章 21,33)。

私が自分のインターネットサイトに、★典礼について★という題で書いている中から、以下の文章を紹介しておきましょう。

|| 多くの教会で、オリエンズ宗教研究所発行の「ともにささげるミサ」が使われていますが、誤解してな
|| らないのは、これはみんなが自分たち独自のミサを工夫したり作り出すための資料ではないというこ
|| とです。決して独自の解釈や工夫を加えてはなりません。そうではなくてこれは、「ローマ・ミサ典礼
|| 書の総則」に沿って実際にミサがささげられるための要約書、ないしガイドブックなのです。

3. 歴

捕囚の地バビロンで、歴代誌を編集した律法学者たちは、主がかつて預言者エゼキヤの口を通して約束された“神のことば”が、今や現実となって成就するという期待に胸をふくらませました(v.23)。歴代誌記者が記録したのは、「ついにその民に向かって主の怒りが燃え上がり、もはや手の施しようがなくなった」(v.16)イスラエルの歴史でありました。その過去の上に、この神の約束への大いなる期待が、短い文章で乗せられたのです。

私たちが知っている現代の教会の有様も、まさにこの「もはや手の施しようがなくなった」状態であるように見えます。聖伝も聖書も、ミサ典礼書も公会議の諸文書も、小教区の現場では事実上“嘲笑い、蔑み、愚弄”されている(v.16)のではないのでしょうか。

「しかしわたしたちは、義の宿る新しい天と新しい地を、神の約束に従って待ち望んでいるのです。」(IIペト 3:13) 主のあわれみと導きが、四旬節を歩む私たち一同の上にありますように。

アーメン。

3月25日 四旬節第5主日

エレ 31:31～34 ハブ 5:7～9 ヨハ 12:20～33

1. ヨハ

vv.20-21 「…… 何人かのギリシア人がいた。彼らは、ガリラヤのベトサイダ出身のフィリポのもとへ来て、“お願いします。イエスにお目にかかりたいのです”と頼んだ。」

現代のキリスト者である私たちが、だれかから“イエスに会いたい”と相談を受けたら、“ミサに出席なさい”と答えるかも知れません。それで、その後このギリシア人たちはどうなったのでしょうか。人はミサに出席しても、その朗読台と祭壇で私たちに会ってくださる“キリストのことば”を理解出来なければ、失望して去って行きます。ヨハネ福音書はここで、まさにその核心に触れているのです。

vv.23-24 「イエスはこうお答えになった。“人の子が栄光を受ける時が来た。はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。”」

弟子たちは最初、この言葉の意味を全く理解出来ませんでした。なぜならこの言葉には直ちにその後v.25が続いていて、それぞれが何を指しているのか納得出来なかったからです。しかしその数日後に、弟子たちはイエスが十字架の上に御自分の命を捨てられたこと(10:11-18 参照)を、確かに見たのでした。そしてイエスの復活の後になって初めて、彼らの福音を理解する目が開かれたのでした。

「一粒の麦」が、他ならぬ「わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた」(ロマ 4:25)イエス・キリストのことであるという明確な事実を、多くの人が気づかずに、間違っ

て解釈しています(マコ 8:31 と 8:34 を参照)。このテキストに登場するギリシア人たちが、今までよりも“少しはましな人間になる”ためにイエスに会いに来て、この答えを聞いたのだとしたら……。人が救いを得るためには、ミサに出席することと並行して、使徒たちによる福音証言を自らしっかりと聖書から学ぶ必要があるのです。

2.

新約聖書によれば使徒たちは、「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました」(エフェ 1:7)、「あなたがたが…… 贖われたのは、金や銀のような朽ち果てるものにはよらず、きずや汚れのない小羊のようなキリストの尊い血によるのです」(1ペト 1:18-19)、「言は肉となって、(世の罪を取り除く神の小羊となるために)わたしたちの間に宿られた」(ヨハ 1:14) という十字架の福音の宣教によって、原始教会という“実を結んで”行きました。ヨハ 12:24 は、このキリストの贖罪の事実を言っているのであって、だれか他の先人たちの偉業のことを指しているわけではありません。そして人は洗礼の秘跡によって、キリストの死にあずかり、キリストの復活にもあずかる者となりました(ロマ 6:1-11、コロ 2:12)。それがヨハ 12:25 の意味であって、それは神の賜物であり、人は自らの行為をいささかでも誇ることがあ

てはなりません(エフェ 2:8-9)。

3. ヘブ

v.8 「キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。」

この「従順」とは、私たち罪人に代わっての従順であって、御子は「過ちと罪のために死んでいた」(エフェ 2:1) 私たちの間に受肉して(ヨハ 1:14、ガラ 4:4-5)、私たちに代わって「激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いをささげ」(v.7)てくださったのです。

それが、「神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ」(II コリ 5:18)と宣べ伝えられている福音の内容であって、このような使徒たちの宣教こそが“ともにささげるミサ”を現代においても意味のあるものにします。人が救いを得るためには、ミサに出席することと並行して、使徒たちによる福音証言を自らしっかりと聖書から学ぶ必要があるということなのです。

4. エレ

私たちのミサで、エレミヤの預言は実現しました。しかし私たちは、今朝の第二朗読で語られている神のことばを理解しているでしょうか。感謝の典礼の奉獻文で、“これはあなたがたのために渡される、わたしのからだ”、“これはわたしの血の杯、あなたがたと多くの人のために流されて、罪のゆるしとなる新しい永遠の契約の血”と司祭が唱えるとき、それはあなたにとっての信仰の実感となっているでしょうか。

私たちは使徒たちから伝えられた福音をしっかりと学んで、“小さい者も大きい者も神を知る”ことが必須の時代に生かされていることを、心から感謝出来るようになりましょう。「わたしは、キリストと共に十字架につけられています。……わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるのです。」(ガラ 2:19-20)

四旬節を通して教会は今、過越の神秘の祭儀に備えて歩んでいます。良い備えが出来て、今年も復活の祭儀で会衆一同が、ミサの閉祭のあいさつに心からの“アレルヤ”を加えることが出来ますように。

アーメン。